肝内胆管癌切除症例における
シグナル伝達物質の評価と病理学的予後因子の検討

1984年から2004年に当科にて肝内胆管癌の手術を受けた患者さんを対象としています

【はじめに】

肝内胆管癌は、肝細胞癌に比べ、予後不良であり治療の選択肢も少ないのが現状です。病理学的診断では血管侵襲やリンパ管侵襲など様々な癌の進展形式があり、予後を左右していると考えられます。

近年、細胞膜受容体であるRobo1の発現低下が様々な癌腫にて確認されており、その予後や悪性度に関連しているという報告があります。肝内胆管癌ではいまだRobo1についての研究報告はありません。

【目的】

・肝内胆管癌切除症例において、病理学的診断と予後の関連を検討します。

・肝内胆管癌におけるRobo1発現の検討。予後との関係の検討を行います。

【研究内容】

当九州大学消化器・総合外科（第二外科）において切除された肝内胆管癌の標本を使って、病理学的因子と予後を統計学的に検証し、予後に関わる因子を決定する。

Robo1を同定する染色を行い、これらのたんぱくの出現の程度を測定します（図1）。

この染色の結果と患者さんの背景を比較し、Robo1の発現低下が果たして肝内胆管癌においてどういった影響を持つのか考察します。

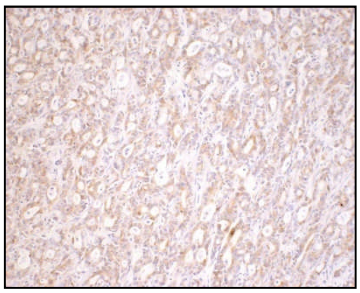


図1．肝内胆管癌におけるRobo1の免疫組織化学染色
茶色く染まっている部分にRobo1タンパクが存在する

【患者さんの個人情報の管理について】

本研究の実施過程及びその結果の公表（学会や論文等）の際には、患者さんを特定できる情報は一切含まれません。

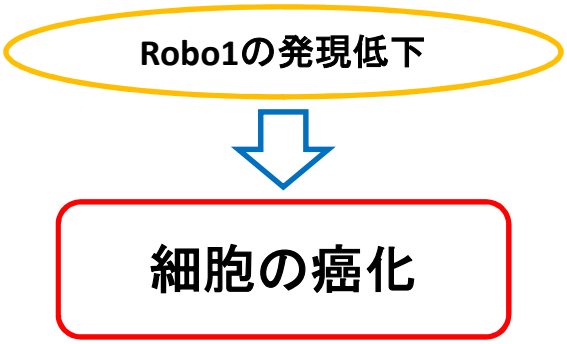
もし対象者となることを希望されない方は、下記連絡先までご連絡下さい。

【研究期間】

平成22年2月5日から平成24年3月31日

【医学上の貢献】

この研究により肝内胆管癌におけるタンパク発現異常と臨床病理学的因子および予後との関連が示唆されれば、新しい予後因子などが明らかとなり、医学上の貢献はあるものと考えます。



【研究機関・組織】

九州大学大学院　消化器・総合外科（第二外科）

責任者　教授　前原　喜彦

講師　調　憲

助教　武冨　紹信

大学院生　間野　洋平

連絡先：〒812-8582 福岡市東区馬出3-1-1

Tel 092-642-5466

大学院生　間野　洋平